

だ い あ ぐ

東京彩人記

長期入院や施設入所の子もたちに、芸術と触れて笑顔になってほしい。NPO法人スマイリングホスピタルジャパン(杉並区)は、プロのアーティストに医療機関や施設をボランティア訪問してもらい、子どもたちが音楽や絵、工作、マジックなどに親しむ時間を提供している。法人代表理事の松本恵里さん(56)に、活動への思いを聞いた。

【五味香織】

——活動拠点はどんな場所ですか。

——活動拠点はどんな場所から出られない子はベッド脇を訪ね、個別に楽しんでもらいます。

——病院で活動する意味は。

012年に神奈川県内の病院で始め、今はほぼ全国の約30カ所に広がりました。年間約300回、延べ約6200人の子もや保護者を訪ねています。7月から在宅訪問も始めました。活動内容は、ピアノなどの演奏や版画作り、マジックや紙芝居など多様で、どれも参加型です。病棟のプレールームで開催しますが、病室から出られない子はベッド脇を訪ね、個別に楽しんでもらいます。

患者は子どもらしい体験も十分にできない中、苦しい治療に耐えています。定期的な訪問で、単調な生活の中に次回を楽しみにするリズムをつくり、わくわくする気持ちを持ってもらえたらと思っています。小児病棟は感染予防のため、基本的に保護者しか入れません。アーティスト

スマイリングホスピタルジャパン代表理事 松本 恵里さん(56)



まつもと・えり 1960年生まれ。外資系銀行を結婚退職し、2003年に教員免許を取得。院内学級で英語教員を務める。12年にスマイリングホスピタルジャパンを設立した。詳細はサイト(<http://www.smilinghpj.org>)

芸術で子どもを笑顔に

やスタッフは、感染症の抗体検査や健康診断を必ず受けます。

——なぜこの活動を始めたのですか。

——子どもたちに芸術を「考えたのは、一度習いたい」とフルート

——今後の展望を聞かせてください。

ある大学病院の小児病棟に、重い疾患の少年がいた。1週間、付き添いもお見舞いの姿も見なかった。社会から切り離された日々を過ごす子どもたちにとって、アーティストの訪問はどれほどの光になるだろうか。一人でも多くの子どもが笑顔になり、生きる力を感じられたらと思う。

記者の一言

院内学級の子もたちがが亡くなったこともあります。いつしか「自分が身を置く場所はここだ」と感じるようになりました。実は教員免許を取る勉強中、交通事故で生死の境をさまよひ、1年間の入院やリハビリもあきらめなければなら

そうと思って教員免許を取り得しました。大学病院の院内学級に配属され、初めて重い病気の子もたちに接しました。壮絶な闘病を目の当たりにし、担任した子が

院内学級の子もたちが一番笑顔を見せたのは、芸術に触れた時でした。長期入院している子どもたちは自信を失っています。学校の勉強は遅れ、好きな習い事もあきらめなければなら

が亡くなったこともあります。いつしか「自分が身を置く場所はここだ」と感じるようになりました。実は教員免許を取る勉強中、交通事故で生死の境をさまよひ、1年間の入院やリハビリもあきらめなければなら

を病室に置いていた子と、アーティストが即興で一緒に演奏したこともあります。退院後も孤独を感じることも多いけれど、病氣と闘ったことを誇りに思っている。私たちの訪問が、そのきっかけになったらうれしいです。

——今後の展望を聞かせてください。

子どもたちが前向きになれる良さを実感しているの、いずれこうした活動がチーム医療に組み込まれていけばと願っています。また、在宅で過ごす子どもが増えているので、個別訪問を増やしていきたいです。